

オブジェクト指向と ゲームプログラミング

DirectX Graphics 2D編 - 第6回 テクスチャとサーフェス

テクスチャサーフェスの取得

テクスチャのイメージは、サーフェスが保持しています。このサーフェスは、IDirect3DTexture9::GetSurfaceLevelメソッドで取得することができます。

テクスチャのサーフェスもIDirect3DSurface9インタフェースをとおして操作を行うので、バックバッファやオフスクリーンサーフェスと同様の機能を持ちます。また、テクスチャはD3DPPOOL_MANAGEDプールで作成することが多いので、デバイスリセット時のわずらわしい解放と再生成処理は不要です。

課題

スプライトクラスにサーフェスの機能を追加しましょう。

(1) CSpriteクラスに、サーフェスを管理するのに必要なメンバを追加します。以下のプログラムを適切な場所に追加しましょう。

```
IDirect3DSurface9* m_pD3DSurface;
```

(2) 以下のコンストラクタ初期化子を適切な場所に追加しましょう。

```
m_pD3DSurface(NULL)
```

(3) CSpriteクラスのオブジェクト生成時に、サーフェスの取得を行います。以下のプログラムを完成させ、適切な場所に追加しましょう。

```
// サーフェス取得  
m_pD3DTexture->????????????(0, &m_pD3DSurface);
```

(4) CSpriteクラスのオブジェクト解放時に、サーフェスの解放を行います。以下のプログラムを完成させ、適切な場所に追加しましょう。

```
m_pD3DSurface->Release();
```

(5) スプライトクラスに、サーフェスを利用した機能を追加します。以下のプロトタイプをISpriteクラス定義の適切な場所に追加しましょう。

```
virtual void ColorFill(const RECT* pFill, const D3DCOLOR inColor) = 0;  
  
virtual void LoadFromFile (LPCTSTR inFileName, const RECT* pSrcRect, const RECT* pDestRect,  
                           const DWORD inFilter = D3DX_DEFAULT, const D3DCOLOR inColorKey = 0) = 0;  
virtual void LoadFromSprite(ISprite* pSrcSprite, const RECT* pSrcRect, const RECT* pDestRect,  
                            const DWORD inFilter = D3DX_DEFAULT, const D3DCOLOR inColorKey = 0) = 0;
```

各関数の仕様は、以下のとおりです。

ColorFill

描画

スプライトの指定された領域を指定された色で塗りつぶします。

```
void ColorFill(const RECT* pFill, const D3DCOLOR inColor);
```

pFill 塗りつぶす領域を格納したRECT構造体のアドレス。NULLを指定すると全領域
inColor D3DCOLOR型の塗りつぶす色値

LoadFromFile

読み込

ファイルからイメージを読み込みます。

```
void LoadFromFile(LPCTSTR inFileName, const RECT* pSrcRect, const RECT* pDestRect,  
                 const DWORD inFilter = D3DX_DEFAULT, const D3DCOLOR inColorKey = 0);
```

inFileName	読み込むファイルの名前
pSrcRect	転送元の領域を格納したRECT構造体のアドレス。NULLを指定すると全領域
pDestRect	転送先の領域を格納したRECT構造体のアドレス。NULLを指定すると全領域
inFilter	イメージを拡大縮小するときに使用するフィルタ。透明色を省略するときは省略可
inColorKey	D3DCOLOR型の透明色の色値を指定。省略すると透明色なし

LoadFromSprite

読込

■ スプライトからイメージを読み込みます。

```
void LoadFromSprite(ISprite* pSrcSprite, const RECT* pSrcRect, const RECT* pDestRect,
const DWORD inFilter = D3DX_DEFAULT, const D3DCOLOR inColorKey = 0);
```

pSrcSprite	転送元となるスプライトインタフェースのポインタ
pSrcRect	転送元の領域を格納したRECT構造体のアドレス。NULLを指定すると全領域
pDestRect	転送先の領域を格納したRECT構造体のアドレス。NULLを指定すると全領域
inFilter	イメージを拡大縮小するときに使用するフィルタ。透明色を省略するときは省略可
inColorKey	D3DCOLOR型の透明色の色値を指定。省略すると透明色なし

(6) CSpriteクラスにColorFill関数を追加します。この関数のプロトタイプを(5)をもとに作成し、適切な場所に追加しましょう。

(7) ColorFill関数を実装します。以下のプログラムを完成させ、ソースファイルに追加しましょう。

```

/*****
/*
塗りつぶし
*****/
void CSprite::ColorFill(const RECT* pFill, const D3DCOLOR inColor)
{
    IDirect3DSurface9* pFillSurface = NULL;
    IDirect3DDevice9* pD3DDevice = NULL;

    try {
        // 塗りつぶし領域設定
        RECT fill;
        if(pFill == NULL) {
            D3DSURFACE_DESC desc;
            m_pD3DSurface->GetDesc(&desc);
            ::SetRect(&fill, 0, 0, desc.Width, desc.Height);
        } else {
            fill = *pFill;
        }

        // Direct3Dデバイスオブジェクト取得
        if(m_pD3DTexture->GetDevice(&pD3DDevice) != D3D_OK)
            throw "デバイスオブジェクト取得失敗";

        // 塗りつぶし用のサーフェスを生成
        if(pD3DDevice->CreateOffscreenPlainSurface(fill.right - fill.left, fill.bottom - fill.top,
            D3DFMT_A8R8G8B8, D3DPPOOL_DEFAULT, &pFillSurface, NULL))
            throw "塗りつぶしサーフェス生成失敗";

        // 指定された色で塗りつぶす
        pD3DDevice->????????(pFillSurface, NULL, inColor);

        // 塗りつぶし用サーフェスをテクスチャのサーフェスへロード
        ::D3DXLoadSurfaceFromSurface(m_pD3DSurface, NULL, &fill,
            pFillSurface, NULL, NULL, D3DX_FILTER_POINT, 0);
    } catch(LPCTSTR ErrorString) {
        // エラーメッセージ生成
        TCHAR msg[128];
        ::wsprintf(msg, "*** Error - %s(CSprite_ColorFill)%n", ErrorString);
        ::OutputDebugString(msg);
    }

    SafeRelease(pFillSurface);
    SafeRelease(pD3DDevice);
}

```

IDirect3DDevice9::ColorFillメソッドは、D3DPPOOL_DEFAULTプールのサーフェスしか塗りつぶせません。テクスチャは、D3DPPOOL_MANAGEDプールに配置されることが多いので、D3DPPOOL_DEFAULTプールのサーフェスを生成、それを塗りつぶし、テクスチャのサーフェスにロードしています。

(8) CNullSpriteクラスに「何もしない」ColorFill関数を実装します。以下のプログラムを適切な場所に追加しましょう。

```
virtual void ColorFill(const RECT* pFill, const D3DCOLOR inColor) {}
```

(9) CSpriteクラスにLoadFromFile関数を追加します。この関数のプロトタイプを(5)をもとに作成し、適切な場所に追加しましょう。

(10) LoadFromFile関数を実装します。以下のプログラムを完成させ、ソースファイルに追加しましょう。

```
/*
*****
*/
/*
*****
*/
void CSprite::LoadFromFile(LPCTSTR inFileName, const RECT* pSrcRect, const RECT* pDestRect,
                          const DWORD inFilter, const D3DCOLOR inColorKey)
{
    ::D3DX????????????????(m_pD3DSurface, NULL, pDestRect, inFileName, pSrcRect,
                             inFilter, inColorKey, NULL);
}
```

Direct3DXには、ファイルからサーフェスにイメージを読み込む関数が用意されています。この関数を用いれば、サーフェスに画像を読み込むプログラムが簡単に作成できます。対応しているファイルフォーマットは、.bmp、.dds、.dib、.hdr、.jpg、.pfm、.png、.ppm、.tgaです。

(11) CNullSpriteクラスに「何もしない」LoadFromFile関数を実装しましょう。

(12) CSpriteクラスにLoadFromSprite関数を追加します。この関数のプロトタイプを(5)をもとに作成し、適切な場所に追加しましょう。

(13) スプライトクラスにLoadFromSprite関数を実装するために必要な作業用の関数を作成します。

サーフェスからサーフェスへのイメージの転送は、IDirect3DDevice9::StretchRectメソッドとIDirect3DDevice9::UpdateSurfaceメソッドがありますが、これらのメソッドは、メモリクラスに制限があり、テクスチャに多く使われるD3DPPOOL_MANAGEDプールには使用できません。また、ピクセルフォーマットも同一でないと転送できません。そこで、Direct3DXのD3DXLoadSurfaceFromSurface関数を用います。この関数は、転送速度はかなり低速ですが、拡大縮小、フォーマット変換機能、カラーキー処理、クリッピング、メモリクラス制限なしといった多くの利点があります。

D3DXLoadSurfaceFromSurface関数を使用するには、転送元と転送先のIDirect3DSurface9インタフェースが必要になります。スプライトクラスには、IDirect3DSurface9インタフェースを取得する機能がないので、追加しなければなりません。

IDirect3DSurface9インタフェースを返すGetSurface関数のプロトタイプをISpriteクラス定義の適切な場所に追加しましょう。

```
virtual IDirect3DSurface9* GetSurface() = 0;
```

(14) CSpriteクラスに、GetSurface関数を実装します。以下のプログラムを完成させ、適切な場所に追加しましょう。

```
virtual IDirect3DSurface9* GetSurface() { return ??????????????; }
```

(15) CNullSpriteクラスに、GetSurface関数を実装します。以下のプログラムを適切な場所に追加しましょう。

```
virtual IDirect3DSurface9* GetSurface() { return NULL; }
```

CNullSpriteクラスは、サーフェスを保持していないので、NULLを返します。

(16) CSpriteクラスに、LoadFromSprite関数を実装します。次のプログラムを完成させ、ソースファイルに追加しましょう。

